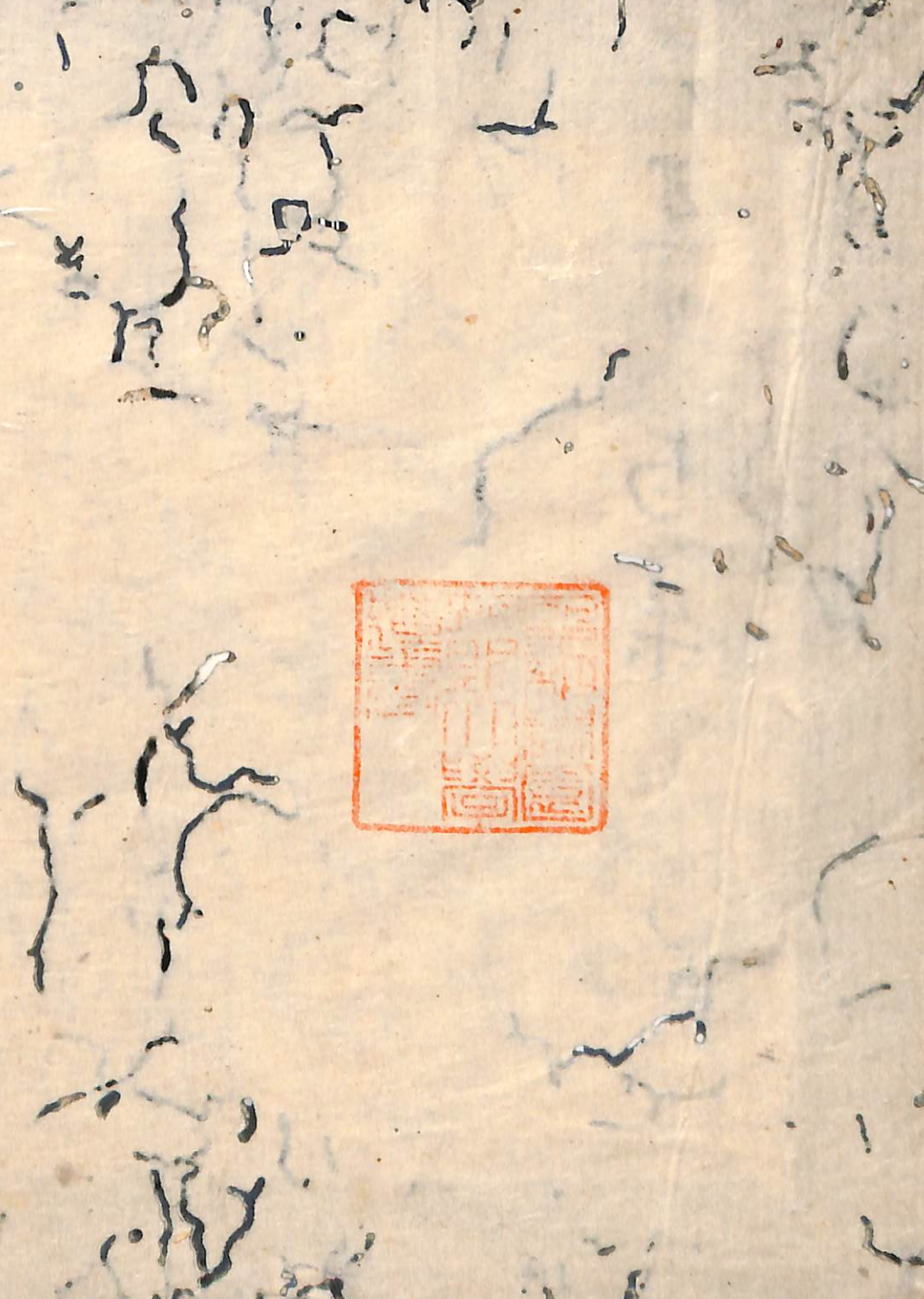


去来友句集

911.3

キ





けり世にまゝ十六弟子とてをこゝにまゝに羅漢をの  
 村ありてはまゝに智恵をまゝに何神通をの  
 徳のたをまゝに孔子の十哲をまゝに  
 人くはまゝに孔子の十哲をまゝに徳行を  
 誰ぞまゝに孔子の十哲をまゝに道の有るまゝに  
 為乃風雅をまゝに孔子の十哲をまゝに  
 のまゝに孔子の十哲をまゝに孔子の十哲を  
 評さまゝに孔子の十哲をまゝに孔子の十哲を  
 下まゝに孔子の十哲をまゝに孔子の十哲を











春つく菊を内庭よりそよこし  
宮大永之宮千の秋あり十日  
山をぬれきてあふ今も花  
ころ重石子再興して今存せり

去才度々佐木

春

元日やうぶの流りのた刀帯ん  
えりや土つうあくる春もせし  
靴形てら逢しあそび花のま  
商人のうらむゆらや伊勢のま  
さしあそびかきや老の油  
あそびやたたまひむて松の陰



月夜のしづかにしきりし門の松  
おぼしうおももよまかぬそらん初子結白  
りのたまはまゝなとみやらしくえん信

巖崎まゝある 照有ま

まきや、ねふ丹波の庭も 陽もそそ  
まきもね晴や 鉢くらあ 片よまじ  
しくひすのきつしよまもしめニ三日  
鶯つや内のしきりししきりしきりし  
美なるしるくしきりしきりしきりし  
しくひすのねりまひきりしきりし谷の底

まきもね晴や 鉢くらあ 片よまじ  
しくひすのきつしよまもしめニ三日

風抑つこまのまきをこんと無ま  
まきで出るま

しくひすの人のきりしきりし梅の底  
初まそそきりしきりし梅のたもひん

上之鵬の山莊まきしくしきりし  
候中侍りし

梅のまきりしきりし山莊まきしくしきりし  
まきりしきりしきりしきりしきりし



子にちよふてきこく 柳の  
意くし人をもこのせきやる  
ま柳のまきいさおふ板を  
姑のまよ入る人き 柳の  
多にさよ園の何けくの  
袖さきまぬ夜とちれ 柳

海ありの文のな

従月一三つとてわかれ

まはり所かへ

多をまひ申よ

出しよまていさる 柳の  
き友よのまぬ 柳の  
外京や二正あれ 柳の  
いくまなり 柳の  
田子町や 柳の  
流つらしひ 柳の  
籠のたのしき 柳の  
帰るまあし 柳の  
一時のまき 柳の  
まふとも行とも 柳の



山在のさる音よあはれも別う能  
折まぬや下まよあるまの雛  
や帆が浪旅をまよの海こり  
うことも入へる烟うつり力あふ  
陽さや口まよまつくたふが馬  
神鳴や一むら雨のさくらり  
ま風よ吹出されり水のたき

口口丸進悼

晴まよす音もる海や那遠の位  
ままを四六に

凡十年の笑を三子の恨み  
その恨を百年のいとせは惜し  
こころ恨名おはくは一向と  
手向て年一うり行まを祈り  
侍るの

なまきくまよこまよの生別  
花をまら日おまよこは二張七

西行の詞をうりて頼政は旅を  
能を踏ま七人かおまよこまよ  
使まらまら馬の鞍むす



花解はねはこそよれ初さねく  
花さや白き花を つかい合せ  
知る人よあはしと花を  
何るも花を人の長刀  
咲花よき世に人や神を  
しりぬ山まゝちるあふさめく  
小袖ちぬ屋な川やうさのま  
一せらきあゆ山こら花さのま  
花えまゝとあまの里のまみあふ

湖と花

花を今眼入り志加果花浦  
立橋の橋り多きよ花の中

田上の花は花えまのうらて

海をうらむ月つきし出と花のま

山と花

木の空の天物も花のま

南都の花

花を今眼入り志加果花浦

立橋の橋り多きよ花の中

田上の花は花えまのうらて



新さな〜言ゆふ〜しや夕栴  
一む〜うち〜や日〜の赤栴  
一む〜いゆ〜お〜や礮馬山

つおは若

山〜の〜ゆ〜を〜机〜  
藪の根〜や〜ゆ〜茶摘〜  
百姓も〜つ〜茶摘〜  
〜ゆ〜  
の〜我〜  
名塔〜

三月と文と書ものも名跡〜  
〜の〜  
神風能海生〜門の〜

一夏

鄭公〜や〜十文字  
〜山〜  
〜人〜  
〜代〜



伊弉諾

卯の花も油のかさうや朝花も  
くの花も 強まるうんつるの門

巡禮のころ

卯の花も及び初花も  
光るあめ二つの山の花も  
色くしの花も 春あそび  
つうにおもふ子をけや 春畑  
おくの草花のしるしや 杜若  
舟ふの一滴 当りそりの花







幾つ世と遊ぶ人もあらぬ 柳の花

え祿七の年久しく遊ぶるは

此の行れなきを待てし

碓氷の茶こほりし 白ひのし

竹のまやらむ 藤の 西心左衛門

武士女子の生長といふ

筆花時よりきりし 子花牛

湖の山まきし 五月

半可くよ三日月あむり

大和紀伊の境をてなし

はまの順禮をそめてながめ

くれ科豆つくるははし 書行

つくりしとて ちや ありし

ちやの 崎

五月のよ 流しや 紀伊のハ 在司

曲水子よ なるて 執田の 堂

見よまきし 夕の 後流し

つきてりし 諸れを ね舟と

さし下して

あつたや 黒津の 梅 咲く



焚火や吹きまわして鳩を圍

妹を子方まわす

父の上よとくく諸るちるらん  
水札啼くを流しる山の上  
鶯もとらく世う水鶯もく  
石垣もなげか入るや倒の籠  
己物の火もとくくおちたる  
猿もくもくもくもくもくもく

本陣くまのうら

山中の殿にを中しと吹らひ

其角の母は

政まゐるきてあそく悔の角  
まけしと政はも物やハ休大系

谷汲寺にて

順祝も志まあや徳よ能は飯  
すしきや浮海能上のさこく  
まあくく人よまきして  
涼しきよ夕をなうく入り  
所とくくあそく夕をみ  
まをぬもあそくあそく







きりまのりやにねのひろくおさこの心欲  
夕くはるにらるるひらきおのり  
は是の舟中より都の方をるるて  
夕之のふししうらまゝのい

さ玉川に記あり

さ玉川にる都をみるは清き水  
霞をて夜をさへん土甲子  
あま月の牛のよるに  
は見えおれはけきあまのうら  
むのしるすの相のぬりか子

夕暮や若とるる花の形  
酒をうぬはる辰と移せ時  
門青見しきく自由なるあはるる

秋

麗ちふふとや初秋乃日おる  
くちさく弱かいらやこの何  
酒をさとなつて酒のむらまじく  
荒前しの里に記あり



のふいとも 沖よ出る雨との瀧  
しほりては けしきも しのび

七夕よも けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

うらつたよ けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

山ちや けしきも しのび

えん けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび

あしとまて けしきも しのび



朝夕まうらうふもは袖のや  
嵐園追時

子母人子剣くめりり若  
お世を盤方まのりくも  
相しきさる人ふ侍。

お祐りりけ世のみは身  
芭蕉あみ奥のぬ道と穉して

そのま石つの子書よ書  
めれつこつ張やつとさ  
稲妻のうきませそ行園夜

七波丸山

つらつらとみ傾城と  
都も伝ましとさるも  
清きまやまうみ下を  
子稲をゆや人尺くもむ

田上

山あまで魚つらふ上  
うけ様まをくと抱はく  
尻抱く馬ぶとさる花  
ひまうし山まてあせ







天月... 神...

國... 神...

...

月... 神...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



以所之や小ニたよとりし鹿の角  
小羅鹿や心る礎とて。おしのもを  
啼し鹿と推の4のつるよ。心なりの  
扱あつし。マをよ。吹とて。若のこへ  
たく山や五を。つてく鹿みお

伊都岐山

之川渚乃山石ふよまや鹿のむ耳  
浦陸や。通し。は。あ。う。う。う。う。  
鈴あ。う。う。う。う。う。う。う。う。

七月廿五日

道安親を此鹿鳴と通し。あけ

人く。う。う。う。う。う。う。う。う。

せ。う。う。う。う。う。う。う。う。

書。う。う。う。う。う。う。う。う。

う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。

書。う。う。う。う。う。う。う。う。

う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。

う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。

う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。

福。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。



同書 読み

今もふてりて 遊女マ鶴了  
先福を向く此浦又都

八月や海のまはきを山く

田家

聞きしとるふあま山子乃腰刀

有磯海集機 強ひき入句

とも書百らつたるあせまに海

祝を

能多の心や形もあまら 有磯海

松茸も人よきるし 鳥元のせん

老て神職ふむらさく人をもどて

花も言て喚福も多し 神の秋

遊波津

芋能種も笑ふつらやあゝの孫

手も女もあまて先は死するも尸

出らるる

秋もあま目もさう菊の谷口

菊咲て花根のかきくや 山

流所 結く

大田



きよのきよふもまほして保るゝ酒底

自題落柿舎

柿ぬゝ木枝きちるきあどり山

落柿舎感偶

柿買ふく入いぬいぬいさるさるききき

芽立より二葉よきるき柿のききと

文字アされしむい川のたききき

う心被着柿ききしちこをききし

をききき柿のきききき柿問のきき

きききき支きききききききき

あもきききききき

息もきききききききききき柿

柿のきききききききききき柿

肉坊きき

法山乃きききききききききき

唐人の柿きききききききき

くれききき

柿きききききききききき柿

嵐の記

西枝持きききききききききき



徳慶甲陽軍艦

あつたまはに信濃の武士を  
そま夜も旅を以て帰るらん

一聖徳院

櫻花のちもさめや社に空  
まき人ともさ口説んあまのそ

冬

やまの羽もかいつくろぬ初

うもつけに馬柳の上や初  
初るこゝろをさき初  
いそらーの仲のすのき帆片帆  
一すらーいれてゆー  
二のーみ地まをさぬ  
志くさやみの山袖と吹  
やしらもせんま  
山守の里二つせき  
海ちお乃上よちあ  
さつりまーあ村に



ら相れ病強ふも聞ては是なり

舟に在る

舟に在る方物に問やあはれ

病の夜中

白濁のあまもりもあやめゆこせり

病も一人前此火燈の如

とお申や火燈の如き月影

病の夜中祈禱の句

本ころのやうにあらまや病のこ

傷亡師歎事

わさしれぬまも七十一夜の泪の如

まの字の件ゆく芭蕉に和乃せりく

とくつやゆくあまれされを名高ま

偶居して心地さへはれすとき

病もあや茶湯の夜に並み端と

いづるうへ

朝もあや人あつてふてあまらま

病三四を我伴もま

まらつてまをま袖のしるし

わさしれぬまも七十一夜の泪の如

軽子筆



小室の積り多うて

船馬よりと注よはや神を月

ねむき

初まの四百里をこし比るは山嶽  
登くといとあつくや高き門  
せめよせと高きつとるや小地は山嶽  
高き山かりと神もなうりり  
九重よりえり山嶽高き石をさび  
神やる高き山嶽のつとるや比る乃高  
旅人の舟は高き山嶽のつとる

旅の中より居る高き山嶽のつとる  
高き山嶽のつとるや比る乃高

悼浪花思

そは叶や高き山嶽のつとる  
高き山嶽のつとるや比る乃高

軍書も清く

高き山嶽のつとるや比る乃高  
高き山嶽のつとるや比る乃高  
高き山嶽のつとるや比る乃高  
高き山嶽のつとるや比る乃高  
高き山嶽のつとるや比る乃高



訪僧より

馬道や菴ををりゆくをわねぬ  
山畑やまきのこしてゆくをよ  
馬をばし眉を毛を——をく龍

卯七より

さぬ月や日ませよ志らくゆくを

さる角より

放とを問ふにふやをく龍

かゝ礪波山撰集

本よりや剣をぬきとる山

夕雲をひくつく礪ののれ葉ハ  
あとのれのふね問歌んををを  
雲を解を落して掃ふを葉を  
たゆみよきて淋き老の神を  
荒礪やをり玉列をををを  
鴨のるくやそ矢を捨て十五年  
尾尻をんともなき生海龍  
それ古き一瓢をんををを  
物より門よりををを  
常よりせをををを



十銭と換へたる所の龍を又  
松人の祀をよみしし物も  
柳の影よ親子思ふと  
侘れを

懐信又よ

ききおや思ひつり山の上

堀川を廻りて

有明をみり向うまきふ

火いけをみり戸をまき  
空電の前

本子下り書おれ  
為りしに

森をまきにやう  
くみゆく北下し

笠人とおひともい  
もんを

陰神おや火と  
替りし

志おふの口よと  
きし

序

池の雨をの  
氷るや

除風子の  
機は

糸のせん  
とたよ

こゝろ  
み

物ありし  
人の

重なる  
し



子庵よ一の宮やまらむし  
 けりて行年のあしや伊勢の  
 行年よまらむしの宮や  
 うとるもみ一宮い何うそ  
 じしとや年の尾とみまらむ  
 神鳴いさかくや今年み  
 ときあみ浦よ腕あして  
 自浪のくさそりや  
 くの夜の魁や  
 年のおや人よ

追加

草柳やう後い  
 十五夜の月みい  
 り和ん。意  
 年奏て伯又と



梁芬倉下藏書





